

# 森敦の「月山」を読む

刈山和俊・柴市郎

作家の森敦(1912～1989)は、昭和8年に「酩酊船」でデビューするものの、まもなく文壇から姿を消し、三十年間近くの放浪の後、「月山」(『季刊芸術』第26号、昭48)を発表し、昭和49年に芥川賞(第70回)を受賞しました。当時62歳の高齢で受賞したことが話題になり、一躍有名になりました。その後、日本放送協会(NHK)の番組に出演して文学を語るなど、晩年に至るまで世の注目を集めつづけました。森敦が生涯をかけて問いつづけた主題を敢えて一言で言うならば、それは生死論といえます。森は、文学において生と死をいかに表現するかという問題に対して、華嚴哲学から得た着想を数学の位相(トポロジー)の概念で言い換えて独自の文学論(表現論)をつくりあげました。その文学論は内部・外部論と呼べるもので、『意味の変容』(筑摩書房、昭59)に纏められています。「月山」や晩年の『われ逝くものごとく』(講談社、昭62)の小説において、その内部・外部論をもとに物語が緻密に構築されています。それらの作品は文学であるとともに哲学的著作でもあります。本稿では、その内部・外部論をふまえながら、「月山」という極めて個性的な小説の一端に触れてみたいと思います。

## 1. 森敦の内部・外部論

『月山』は、主人公Mが古来死者の行く場とされてきた月山の山麓にある注連寺に逗留し、ひと冬を過ごす物語であります。注連寺の寺守のモリじいさんや村落の人々との交流、そして秋・冬・春の月山の自然が織りなす景色を描きながら死とは何か、生とは何か語られます。

私たちのまわりには、生と死、右と左、上と下、昼と夜などの様々な二項

対立がありますが、生と死は他と異なり、私たちは一方の死をけっして体験することが出来ないという特異な二項対立であります。私たちに生は具体的であります、死は抽象的であらざるを得ません。実際、死に対して生は無際限、未完結、そして無目的といった印象を受けます。

森敦は『意味の変容』において以下のように言っています。

任意の一点を中心とし、任意の半径を以て円周を描く。そうすると、円周を境界として、全体概念は二つの領域に分かたれる。境界はこの二つの領域のいずれかに属さねばならぬ。このとき、境界がそれに属せざるところの領域を内部といい、境界がそれに属する領域を外部という。

これは数学の位相空間論の概念を用いて、次のように説明できます。全体概念をユークリッド平面とします。よく知られているように、ユークリッド平面は2つの実数の組で表される無数の点が隙間なく（連続的に）並んだ集合です。その内部を開円板と呼びます。

森敦は開近傍と呼んでいます。開円板は開集合であるといいます。その開円板の外（補集合）が境界の属する領域、外部になるわけです。

さらに、『わが青春 わが放浪』（福武書店、昭57）のなかの「生と死の境界 続・リアリズム・二五倍論」において、森敦は

内部は、境界がそれに属しないところの領域であるから無限であり、無限であることに於いて同等であるものの、境界がそれに属するところの領域からこれを眺めれば大中小とそれぞれ異なった相貌を呈して来るのである。

と言います。位相空間論には、

命題：ユークリッド平面における任意の開円板は、ユークリッド平面自身

に同相である。ゆえに、開円板はすべて同相である。

があります。すなわち、開円板からユークリッド平面への1対1の連続写像が存在して、その逆写像も1対1の連続写像となります。実際、そのような写像を具体的に関数で書くことが出来ます。初めの主張「内部は、境界がそれに属しないところの領域であるから無限であり、無限であることにおいて同等である」は、その命題を根拠としていると考えられます。また、位相空間論では、開円板の境界である円周を開円板に付加した集合を閉円板と呼びます。この閉円板は、その円の半径によって、その大きさを比較することができます。このことから、「境界がそれに属するところの領域からこれを眺めれば大中小とそれぞれ異なった相貌を呈して来るのである」と言っているのでしょうか。また、閉円板は、境界がそれに属する領域、外部となり、閉円板は閉集合であると言うことができ、さらに、その閉円板のユークリッド平面における外（補集合）は、境界がそれに属せざる領域、内部となります。

また、『意味の変容』と同様に、『十二夜 月山注連寺にて』（実業之日本社、昭62）のなかの「講演 第十二夜 吹雪も過ぎて」において、森敦は、この内部と外部の概念を用いて、生死の構造について次のように述べます。

生は境界がそれに属せざる場所の領域、内部と呼ばれるべきものです。このとき境界を仏教では幽明境といいます。（中略）したがって、死は境界すなわち幽明境がそれに属する領域、外部と呼ばれるべきもので、境界すなわち幽明境がそれに属せざるものとしての生から意味を変容して、死を観想することが出来ます。いまもしわたしが癌だと宣告されたと致しましょう。いまのいままで境界すなわち幽明境がそれに属せざる領域、内部にあるとして生を謳歌していたわたしは、境界すなわち幽明境がそれに属する領域、外部にあるものとして死に戦かねばなりません。

森は、境界が属さない内部の無際限性、未完結性という性質に拠りつつ、内部に生を、そして境界および境界の属する外部に死を対応させて、生と死

の二項対立をユークリッド平面における内部と外部の分割として図表的に表現しています（図省略）。そして、引用部の主張のように、「生の内部が意味を変容して、死の外部になる」と言うとともに、「逆に、死の外部が意味を変容して、生の内部になることもある」とも言います。

森敦がよく引用する華嚴経の「全世界が蓮の葉にころがる水滴に映し出される」は、先程説明したように、〈ユークリッド平面全体＝全世界がある開円板＝水滴に同相的に写像あるいは射影される〉と言い換えられます。このことは、太陽の光による射影から着想したものと思われます。この華嚴経の考え方は、ギリシャの新プラトン主義者プロティノスによるいわゆる「一者の流出」と共通していると宗教学者中村元は指摘しています。さらに、バロック時代ドイツの哲学者ライプニッツがプロティノスの影響を受けて論文「モノドロジー」を著しました。そこで使われている概念の表現（表象）は、同相写像であるといえます。この写像の概念は、現代物理学の一般相対論における、微分同相写像や共形変換（スケーリング）に、また量子力学や現代数学のユニタリー表現に発展しています。

さて、森敦をしてこの内部・外部論をもって「月山」を書かせた実際の経験はなんであったのでしょうか。ふたたび『十二夜 月山注連寺にて』、「講演 第十二夜 吹雪も過ぎて」において、森敦は

わたしは寺守のじさまモリさんがトントン、トントンと割り箸をつくるのを聴くことによって猛吹雪を耐えたのです。あの祈祷簿の蚊帳にあって、わたしが観想させられたものこそ生死一如ではなかったのでしょうか。そのとき、寺守のじさまモリさんはわたしにとってなんだったのでしょうか。すくなくとも、わたしが一如となって、わたしをわたしらしめたその人です。

と言います。その「生死一如を観想する」とは、いかなることでしょうか。さらに、森敦は次のようなことを言います。

行入すればわたしたちが近傍としてあるところの領域を、意味を変容して死として神として仏として想念した外部と呼ばれる領域と等しからめることができるのです。(中略) わたしたちが念誦してそれと一如たらしめた境界すなわち幽明境がそれに属する外部と呼ばれる領域には、つねに中心になるところの一点がある、わたしたちは一如たることによって不動を得るのです。これが瑜伽です。

ここで、近傍は開円板のことであり、森は極限的境位において内部と外部が合一して全体(宇宙)になり、その中心において不動を得ると説明します。実際、森はこのことをメビウスの帯を用いて巧妙に説明します。この解説は機会があれば他処に譲って、ここでは次のように解釈してみます。モリじいさんを外部にあるとして、主人公Mはモリじいさんを外部にある他者として、内部の開円板の中心に自己を打ち立てながら、その開円板を限りなく収縮させ、折り畳み、極限まで無=空に近づけるなら、そしてそれは即全体になるといえないでしょうか。位相空間論では、全体集合と空集合は開集合であるとともに閉集合であるという特別な性質をもちます。この性質から、全体が開(生)かつ閉(死)であることが生死一如であることに対応するといえます。森敦はその全体を宇宙といいます。実際に、この生死一如の観想・悟入とは全体の宇宙なるものに溶融・帰入するような体験と思われまふ。多くの東洋の宗教者がこれと類似の体験を語っていることを、哲学者井筒俊彦のいろいろな論文、著書、例えば『意識と本質 精神的東洋を求めて』(岩波書店、昭58)等で知ることが出来ます。

『わが青春 わが放浪』、「生と死の境界 続・リアリズム一・二五倍論」において、森敦は

わたしたちのあらゆる認識がそうしなければならぬように、境界がそれに属するところの領域、すなわち死なる外部を、境界が属せざるところの領域、すなわちこの生なる内部に創造し、まさに生の生たるゆえんを証明しようとする試みとしての、さまざまな生死観なるものがでて来るのだ。

と言います。さらに、数学基礎論におけるゲーデルの不完全性定理のアナロジーに倣って、前述の内部に外部を完璧に実現することは不可能であるとも述べ、最後に

真実はまだ真実らしく現れるあいだ真実であり、これを真実であるとするれば真実でないということにおいて、哲学しようという考え方に、わたしは次第に追い込んで行ったのだ。

と言います。小説『月山』は、いま解説した内部・外部の論理モデルを背景として緻密に組み立てられている小説です。そのことの一部を『月山』の抜粋と照らし合わせながら以下に検証してみましょう。

## 2. 〈内部・外部〉論から読む『月山』

『月山』は冒頭「未だ生を知らず、焉ぞ死を知らん」から始まり、主人公Mは、

ながく庄内平野を転々としながらも、その裏ともい**ひじおり**うべき肘折の溪谷をわけ入るまで月山がな**がつさん**ぜ月の山と呼ばれるか知りませんでした。

そして、

月山が、古来、死者の行くあの世の山とされていたのも、死こそはわたしたちにとってまさにあるべき唯一のものでありながら、そのいかなるものかを覗かせようとせず、ひとたび覗けば語ることをゆるさぬ、死のた**くら**ら**み**めいたものを感じさせるためかもしれません。

と語ります。ここで、月山および月は死を象徴しています。Mは、月山の麓にある注連寺に逗留します。注連寺は往時の勢いはなく荒れてひとりモリじいさんが寺守をしています。Mは寺の庫裡の二階に起居していて、吹きさらしの冬の寒さに耐えかねて、納戸にあった葭簀のひもと角材とに和紙を貼り

あわせて八畳いっばいの蚊帳をつくりそれに電球を引き入れ寒さをしのぎます。

でき上がってみると想像以上に居心地がいいのです。(中略)それはもう曠野の中の小屋などという感じはなく、なにか自分で紡いだ繭の中にでもいるようで、こうして時を待つうちには、わたしも変成して、どこかに飛び立つときがくるような気がするのです。

ここで、八畳の蚊帳、曠野、曠野の中の小屋、そして蚕の繭は内部であり、これらは内部として同等(同相)であります。そして、外部から見ればそれらは大中小と区別されます。さらに、Mは蚕に置き換えられ、蚕の幼虫が繭を破り蛾へと変成して飛び立つように、いずれMも今いる蚊帳、注連寺、あるいは注連寺のある村落を去り新たに生まれ変わる時がくるといいます。このことは、Mは生から死、そして死から生へと移行(輪廻)していくことを表象しています。また、つぎに主人公Mは「吹き」に変換され、全体としての広大な山ふところが開近傍としての八畳の蚊帳に同相であると感じ入ります。

わたし自身が吹<sup>ふ</sup>きとともに吹いて来て、吹いて行くような気もすれば、もはやひとつの天地ともいうべき広大な山<sup>ふ</sup>ところが、僅か八畳に満たぬこの蚊帳の中にあるような気もするのですが、眠りを誘う単調までの吹きのざわめきに、うつらうつらしてきたようです。しかし、これもひとり繭の中にある者の、いわば冬眠の夢といったものかもしれません。

ここで、生と死の二項対立はそれぞれ覚醒と夢に対応させられ、繭の中は覚醒の内部から夢の外部に変容します。

森敦は、内部に外部を表現することで生の生たるゆえんを証明しようと言っていました。ユークリッド平面の全体において、内部の開円板(開近傍)に外部に表現する、すなわち同相写像で移すことはできません。しかし境界

と開円板の中心を除けば可能です。そこで、論理的（数学的）な厳密性をすこし緩め、形而上学として全体を全体概念と考へ、全体概念は内部と境界からなるとし、その中心は、全体概念としての内部なるものもっている矛盾をすべて集中した点であるとしませう。そして、われわれ人間とは〈われわれの近傍の原点に、矛盾として実存〉しているものであると同時に、〈矛盾はつねに無矛盾であろうとする方向を持つ〉。その方向によって作られる道が時間であると森敦は言います（付録 『意味の変容』ノオト、『『天沼』注解岩井克人』参照）。

わたしにはすべてが空しく、冬の果てしなさが耐えがなくなってきました。（中略）寺のじさまが割り箸を割っているという思いは、わたしの心を支えるどころか、いよいよ空しさをそそり、空恐ろしささえ感じさせるのです。寺のじさまもそうして割り箸を割ることがまさに祈りであり、その祈りはただいまに耐えるというだけの願いなのに、その祈りによってもなおいますら耐えられぬものがあるのでしょうか。

ここで、モリじいさんは主人公Mを外部にあるとして境界に属せざる内部の中心に実存します。内部の無際限性、未完結性、そして無目的性に由来する中心の矛盾に対抗して、トントンと割り箸を割ることで時間（未来）を生成しモリじいさんの自己を保持するのでしょうか。同時に、Mは、自己の内部の中心にあつて外部にあるモリじいさんの箸を割る音で自己を保持し、そして生死一如の悟入に至るのでしょうか。

いつとも知れず赤いというか、黒いというか、地獄の火のように溪越しの雪山の頂が夕焼けてくるのです。（中略）その夕焼けは雪の山々を動かしては戻して、彼方へ彼方へと退いて行き、すべての雪の山々が黒ずんでしまった薄闇の中に、臥した牛さながらの月山がひとり燃え立っているのです。（中略）わたしは言いようのない寂寞にほとんど叫び出さずにはいられなくなりながら、どこかで唄われてでもいるように、あの念仏の御詠歌が思い出されて来ました。

へ 彼の岸に願いをかけて大綱の  
へ 曳く手に漏るる人はあらじな

それにしても、なにものもとらえて漏らさぬ大綱を曳く手とは何なのか。それほど仏の慈悲が廣大だというのなら、廣大なることによって慈悲ほど残忍な様相をおびてくるものはないであろう。

Mは、長い放浪の末、ただ一人の友人との音信も途絶え、ひとり夕闇の月山の麓に佇み今にも消え入りそうになります。繰り返しになりますが、Mが内部の開近傍の中心にあって自己を打ちたてるためには外部（の境界）が必要です。その外部は、他者に他なりません。その他者を喪失することは内部の開近傍が縮退し無＝空にならんとしようとしているといえます。それは死を意味し、ここで表現されている月山の景色は死に対する寂寥・恐怖ではないのでしょうか。無＝空の後に全体になる。そこで、Mは念仏の御詠歌を思い出します。太陽が万物に照射し（命の）恵みを与えるように、仏は、細大漏らさず全体に慈悲をもたらすと御詠歌は唄います。これは尊く有難いことではありますが、他方、全体主義にいたる危険を孕んでいることを警戒しているのでしょうか。このような全体を透過する神の視点および神自身を19世紀の終わりにニーチェが告発したことはよく知られています。そしてニーチェは永遠回帰の思想を唱えました。

厳しい冬の積雪も緩む頃、Mは境内の裏山にある方丈たちの無数の卵塔があるところで

まるで石が温もりを持つように雪をくぼませて、その底から丸い顔をのぞかせているところもあれば、すでに雪を解かして乾いた土を見せているところもあって、鬼アザミが咲いている。（中略）点々と咲く鬼アザミが遠ざかるにつれて密になり、雪からいちめに咲き出たように思えるのです。わたしは息をのんで、しばらくこうして春を生みなして来たものが、おのれであるとも見せず、雪の山々の彼方に、臥した牛のような姿でなお月山が皓々と聳えているのに気もつかない

かったのです。やがて、境内の雪も解けはじめ、いたるところ小流れになって、ばんげ（露の花）が点々と黄を散らすとみているうちに、部落の萱屋根をおおう木々がいっせいに花を咲かせて来ました。それがまた部落を透かした花のかすみを見るように美しく、この世のことも思えないのです。

森敦は、生死一如としての全体を、厳冬の一面雪に覆われた月山（月山および羽黒山、湯殿山からなる出羽三山一帯）の山々や山ふとこで象徴していると考えられます。一様に雪によって覆い尽くされた山々の全体は、哲学でいう絶対無差別一者になぞらえられるものであり、抽象位相空間論でいう密着空間（dense space）に相当します（「月山」の冒頭の月も死の象徴であるとともに生死一如の全体を象徴しています）。この全体としての月山を覆っている雪の下に、来る春に備えた植物、動物を含めたあらゆる生命が宿っています。春の到来とともにいっせいにその生命が発動される様子を上の文章は表しています。まさに道元の言う「世界開起」というところでしょうか。春の訪れを美しく夢想的に記したこの箇所は、生死一如の悟入、無＝空への折り畳み、即充溢した全体の展開（開起）の一連なりを具現化した表現であるとも解釈できます。

やがてMのところ各地を転々としてきた友人が訪れ部落を去るときが来ます。その前日の夕暮れ、昼間寝ていて目のさえたMと夢うつつの友人が床を並べて次のような会話をします。

十王峠は幽明の境のように言われ、じじつそんなところと聞かされていたせいか、そこを越え戻ろうとするまさにこの世であるべきそうした眺めが、かえってこの世ならぬもののように浮かんでくるのですが、「そいつはまア、十王峠から鳥海山でも眺めながら話すでしょう。似てるんだな、そこもここと・・・」（中略）

「そうなんだ。この山ふところにはいって月山をみたときは、いつかここに来て、こうして眺めたことがあるような気がしたくらいだよ」

「そうかい。ぼくもそんな気がしたが、そんな気にさせる山なのかな、

月山は」

「それで、霊場だとかなんだとか言われるんじゃないかな。前世でも見たように思えるだろうからね」

「前世？」

「うん。前世を見たような気がすれば、すぐあの世もあるような気がするだろうからね。もっとも、月山や鳥海山はいわば山としては典型的なものだからね。どこかでこれと似た山を見ているだろうし……」

「そういうこともあるだろうがね」

友人も

「いやァ、長い間、這い上がっては転げ落ち、転げ落ちてはまた這い上がるようなものだったよ。まるで、鉢に落ちたカメ虫みたいにね」

Mと友人は十王峠の送電線の電柱が見える所で見送りに来た寺のモリじいさんに別れを告げました。

ここで、最後の友人の言葉はMが数日前に経験したばかりのことと全く同じことです。すると会話の文脈から、その友人は前世のMであり、時間を巡回させて前世のMとこの世のMが会話を交わしていることを暗示しているといえます。もちろんそのことは、現実には起こり得ません。しかし、生死一如と同じように、夢の中で、あの世の外部にいる友人とこの世の内部にいるMが遭遇して会話することをメビウスの帯を用いて説明することが可能です。友人も、内部である庄内平野から、死者が赴く外部の場所の月山に入り、そして今主人公Mとともに月山を去ろうとする時に当たって、外部の月山が内部に変容し、内部であった庄内平野が外部に変容することを実感します。

### 3. 鉢のなかのカメ虫

この「月山」という小説のあらすじは、主人公の「わたし」が月山の山ふところ、七五三掛にある注連寺という荒れ果てた寺で一冬を過ごし、春にな

りその地を去る、という極めてシンプルなものですが、「わたし」が注連寺に滞在するなかで体験する様々な事柄は変化に富むものです。

ここで、主人公が注連寺滞在中に遭遇した鉢のなかのカメ虫のエピソードに着目してみます。厳しかった冬が去り、集落によりやく春の気配が訪れたころ、「わたし」は部屋の片隅にある大きな鉢のなかにいる一匹のカメ虫に気づきます。この鉢は冬の間、空気の乾燥を防ぐために「わたし」が水を張っておいたものですが、長い冬の間すでに水が蒸発し、鉢は乾いています。その中にカメ虫が一匹、「底から這い上がろうとしては転げ落ち」ることを繰り返しています。「なにか残酷な気持ち」になった「わたし」はカメ虫を助けることもなく、その様子を見つめています。「どのくらいかかったのか」、いつしかカメ虫は、鉢の縁まで登ってきており、「おもむろに甲殻を拡げると薄羽を出して、ブーンと飛び立って境内を過ぎ、杉の立ち木を抜けて部落の繁みのほうへ」飛び去って行きました。「わたし」は思わず失笑します。「ああして飛んで行けるなら、なにも縁まで這い上がることはない。そのバカさ加減がたまらなくおかしく」思われたからです。

さて、この些末にも見えるエピソードにすら森の内部・外部論が投影されていることを確認しておきたいと思います。この場面では、空間はそこにある鉢によって外部と内部とに分節化されていると見なすことができます。鉢のなかでもがいているカメ虫は、鉢の縁を境界とする内部におり、それを「わたし」は外部から眺めています。森の内部・外部論によれば「内部とは境界が属せざるところの領域」として定義されていますので、カメ虫は鉢の内部にいる以上、カメ虫は無限の空間に圍繞されているわけであり、その外部へ出るためにどうすればいいかという視野を持つことはできません。境界＝鉢の縁はすでに外部に属しているわけですから。「わたし」がカメ虫に感じた「バカさ加減」とは、しょせん「境界に属するところの領域」に属しているから抱き得た感慨に過ぎないわけです。以上、見てきた通り、この少し滑稽なエピソードは森の内部・外部の数学的な定義を正確にふまえています。

しかし、鉢のなかのカメ虫の話はこれで終わるものではありません。「たとえ這い上がっても飛び立って行く」ところがないために、這い上がろうともしない自分を思って、わたしはなにか空恐ろしくなって来」るのです。冬も終わり、すでに注連寺に居続ける理由がなくなっているにもかかわらず、

どこにも行こうとしない「わたし」のすがたがカメ虫と重なり、先ほどのカメ虫への冷笑は忽ち己への反省的な意識へと反転するのです。この時、先ほどまでは外部に属していた「わたし」は、月山のふもとの七五三掛村の内部になすすべもなく置かれている存在へと転化しているのです。以上の分析は一例ですが、このような内部と外部の転換のようなダイナミックな事象が「月山」という小説には様々にしかも論理的に描かれています。それはあたかも月山という特殊な磁場が、そのような論理のうねりを可能にしているかのようにも考えられます。

#### 4. まとめ

最後に、哲学者ドゥルーズの概念を用いて「月山」を次のように要約できます。

森敦は、「月山」で、月山自体が死と生の世界、すなわち、生死一如の全体であり、村人を含め動物、植物、鉱物など自然のいろいろなものが生まれては滅し、滅しては生まれていく、あるいは流れていく世界、すなわち多様体 (multiplicity) を表現したのではないのでしょうか。「吹き」の月山が死とともに絶対無的空間をも表象する。そして、生死一如の観照の瞬間は「永遠の今」と、また、春の訪れとともに村の木々の花が一斉に咲き、霞を見るようなひと時を「世界開起」である「永遠の今」であると看取することもできないのでしょうか。そして、母胎として月山の全体は輪廻のあるいは永遠回帰の場であると考えることができないのでしょうか。

(本稿は、2018年1月19日の尾道文学談話会における発表「森敦の『月山』を読む」の原稿化である。)

—かりやま・かずとし 経済情報学部名誉教授—  
—しば・いちろう 日本文学科教授—